様　式　C－19、F－19、Z－19　(共通)

KAKENHI 科研費

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 27 年　6 月 13 日現在

機関番号：12603
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2014
課題番号：22510257

研究課題名（和文）現代パレスチナ文化の動態研究―生成と継承の現場から

研究課題名（英文）The Dynamics of Modern Palestinian Culture: Views from the Field of Its Creation and Succession

研究代表者
山本　薫（Yamamoto, Kaoru）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：10431967

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代パレスチナ文化の担い手たちの思想、実践、アイデンティティ、彼らを取り巻く政治的・経済的・社会的環境を、作品の分析に加え、当事者への聞き取りや活動の現場の実地調査を通じて解明することを目指した。調査はヨルダン川西岸地区とレバノンを中心に行い、ヨルダン川西岸地区については近年、極めて活発な活動が認められる文化センターやNGOといった文化関係団体の役割やネットワーク、援助のあり様などを掘り下げた。一方のレバノンでは、パレスチナ人コミュニティが置かれている苛酷な状況と、その歴史的・社会的背景を明らかにした上で、彼らの文化活動の現状や意義、ナショナル・アイデンティティとの関わりを考察した。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to investigate the thoughts, practices and identities of bearers of the modern Palestinian culture along with their political, economic and social surroundings, through not only an analysis of their work but also interviews and field research. In the West Bank, the role and the network of cultural organizations were explored in addition to the aid system. In Lebanon, the present situation of cultural activity among Palestinian people and its significance were examined in reference to their national identities.
This study concluded that despite the ongoing political and social divisions, the cultural movement of Palestinians is so dynamic that it can tie Palestinian communities together around the world, and the network of the people who feel that they are a part of the Palestinian culture and want to participate in the process of its creation and succession extends far beyond the limited borders of a prospective Palestinian state.

研究分野：アラブ文学・文化研究

キーワード：パレスチナ　イスラエル　レバノン　アラブ　文化　芸術　NGO　ナショナル・アイデンティティ

１．研究開始当初の背景

パレスチナの人々のナショナル・アイデンティティの形成は近代の政治状況の産物であるが、その過程には文化という要因が大きな役割を果たしてきた。パレスチナ人の存在を不可視化しようとする力を前に、パレスチナ人は現にここにいると主張する声を後押ししたのは、同じ歴史と文化を共有しているという人々の意識であり、パレスチナの文化人とはそうした意識の醸成を自らの役割であると自覚する人々であった。

現代のパレスチナ文化が生成･継承される現場は、パレスチナ人のディアスポラ（離散）状況を反映して、３つに大別することが出来る。研究開始当初のそれぞれの状況と、筆者の問題意識を以下にまとめる。

(1)パレスチナ自治区：筆者はかつてヨルダン川西岸地区・ガザ地区を訪れ、アーティスト、文化センター、各種 NGO 等への聞き取り調査を行った。（「1993 年～94 年被占領パレスチナ／イスラエル訪問報告:資料集」豊穣な記憶－パレスチナ･インティファーダ世代の音と映像実行委員会編、非公刊）。その時に調査した個人や団体の多くは、1987 年にパレスチナ全土に広がった反占領の民衆蜂起である第一次インティファーダを担い、あるいはそれに大きく影響を受けた世代であった。インティファーダの経験は彼らのパレスチナ人としての自覚を刺激し、パレスチナの伝統や文化に目を開かせた。だがそれは単なる伝統回帰ではなく、新たなパレスチナ人像、新たなパレスチナの文化を生み出そうとする革新的な動きでもあった。また彼らは既存の政治組織との関係にきわめて鋭敏な感覚を持っていた。パレスチナにおいて文化･芸術に携わる人々は、ナショナルな運動や政治状況ときわめて密接に連動しつつ、自立した創作活動を目指すと同時に、啓蒙的な活動や教育、特に子どもたちへの教育活動に携わることで、コミュニティの意識を先導する社会的な役割も果たしていたのである。この時の調査からすでに 15 年あまりが経過し、彼らの状況にも変化が生じている。暫定自治が始まったことで限定的ながら「国家」の輪郭が形作られ、政治･経済構造が組み替えられた。文化担当の省庁が出来、海外との資金援助や連絡のパイプも太くなった。こうした変化は彼らの意識や活動、コミュニティにおける役割などにどう反映しているのであろうか。

(2)イスラエル領内：イスラエルの建国後も留まり続け、イスラエル国籍を取得したアラブ系／パレスチナ系市民は現在、イスラエル人口の 2 割に上る。様々な差別や抑圧を受けつつも、イスラエル国家の一部として生きてきた彼らの帰属意識はアラブ、パレスチナ、イスラエル、宗教共同体の間で複雑に揺れ動き、重なり合う。そこから、彼らが生成･継承しようとする文化もおのずと独特の問題群をはらむことになる。イスラエルのアラブ系／パレスチナ系は早い時期から優れた文学者を輩出し、日本でもここ数年、翻訳紹介が続いている。加えて近年目につくのが映画監督の国際的な活躍である。ミシェル・クレイフィ、エリア・スレイマン、ハーニー・アブーアサドという、世界的映画祭で受賞を重ねる才能あふれる映画人は 3 人ともイスラエル領内のナザレ出身で、長じて欧米にわたり、パレスチナを舞台にした映画を取り続けているという共通項を持つ。もう一つ、申請者が注目しているのがポピュラー音楽、特にラップである。イスラエル領内のリッダ（ロッド）で生まれたラップグループ DAM は、米のヒップホップ文化に深く影響を受けつつも、ヘブライ語とアラビア語の両方でオリジナルな政治的メッセージとアラブ音楽のエッセンスを備えたラップを生み出し、パレスチナ自治区でも圧倒的な支持を受けている。イスラエルのユダヤ社会や欧米社会と応答しつつ生きてきた彼らと“パレスチナ”との距

離感は、その作品にどう反映しているのであろうか。

(3)周辺アラブ諸国および非アラブ諸国：“パレスチナ”との距離感やアイデンティティの重層性は、難民･移民、特にその子孫として周辺アラブ諸国や非アラブ諸国で生まれ育ったパレスチナ系の人々にとって切実な問題を孕む。端的に言えば、何が彼らを“パレスチナ人”たらしめるのであろうか。

２．研究の目的

上記の背景と問題意識を踏まえ、本研究では、現代パレスチナ文化の担い手たちの思想･実践・アイデンティティおよび彼らを取り巻く政治･経済･社会環境を、作品の分析に加えて、当事者たちへの聞き取り調査や活動の現場の実地調査を通じて明らかにすることを目指した。その際、本研究では「何がパレスチナ文化か」という本質論を出発点にも到着点にもすることなく、パレスチナ文化の個々の担い手たちが何を「パレスチナ文化」であると認識し、選び取り、それを継承あるいは生成しようとしているのか、またそのプロセスにはどのような環境が関わっているのかを調査することで、現代パレスチナ文化のダイナミズムを捉えると同時に、重層的に生起しつづける彼らのアイデンティティの有り様に迫り、政治的･社会的分断の進む「パレスチナ人社会」の行く末を予見しようと試みた。

３．研究の方法

上記の目的に達するために、本研究では、作品の分析に加え、当事者たちへの聞き取りや活動の現場の実地調査を行う手法をとった。調査対象はアーティストおよび文化・芸術の振興や教育の分野で活動する団体とし、調査地域は当初、イスラエル領内、パレスチナ自治区、周辺アラブ諸国、欧米諸国と幅広く設定したが、次第にヨルダン川西岸地区とレバノンに焦点が絞られていった。ヨルダン川西岸地区については近年、文化センターやNGO などの活動が極めて活発であることが調査の過程で明らかになり、そうした文化関係団体の役割やネットワーク、援助のあり方などを掘り下げていくことにした。一方のレバノンは、ディアスポラのパレスチナ人コミュニティの中でも特に苛酷な状況下で、パレスチナ人の文化活動や彼らのアイデンティティの現状を調べるのに最適な場であり、また西岸地区との比較においても興味深い事例になると考え、アーティストや文化団体へのインタビューや実地調査に取り組んだ。

４．研究成果

研究成果の主要部分は、研究協力者の田浪亜央江氏と共に、「現代パレスチナ文化の動態研究：生成と継承の現場から」と題したA4判148頁の成果報告書にまとめ、冊子の形で印刷・配布するとともに、PDF 形式でウェブサイト上に一般公開した。

（http://palestine-heiwa.org/library1/Yamamoto-Tanami-Research_Report.html）

報告書は二部構成になっており、第一部には研究代表者の山本薫による論文「レバノンにおけるパレスチナ文化の現状」と、研究協力者の田浪亜央江による論文「パレスチナにおける文化活動の現状－ヨルダン川西岸地区における文化関係団体の役割を中心に」を収録した。第二部の資料編には、インタビュー集とパレスチナ文化関係団体リストを収録した。インタビュー集は調査期間中に集めた大量の聞き取りデータのうち、パレスチナ文化の動向や理念の理解にとって特に示唆に富んだものを厳選した。収録順に紹介すると、ジョージ・イブラヒム氏は演劇、スハイル・フーリー氏は音楽の分野で長年活躍する先駆的なアーティストであると同時に、それぞれが劇団・劇場と音楽院を設立し、運営している立場でもあり、パレスチナにおける文化運動の中心的な存在といえる。スライマ

ン・マンスール氏は、占領下で育まれたパレスチナ美術を代表する伝説的な画家であり、歴史の体現者として、また最新の現代美術学校の設立・運営に関わっている現在の立場からも、極めて貴重な証言者である。オマル・カッターン氏は現在、パレスチナ内外で最も大規模かつ注目を集める文化・芸術・教育分野のプログラムを行っている A.M.カッターン財団の運営責任者であり、自身も映画監督・プロデューサーとしてパレスチナ映画の発展に寄与してきた。ディアスポラで生まれ育ち、国際的な人脈を持つオマル氏は、パレスチナ文化の世界的展開を熟知する立場にある。また財団の創設者であるオマル氏の父、アブドル・ムフシン氏の生涯と功績からは、しばしば海外援助頼みと批判されるパレスチナの NGO が、パレスチナ人自身の資金と尽力によっても支えられていることがわかる。一方、レバノンからは、映画監督のハーディー・ザッカーク氏と、NGO 代表のムウタッズ・ダッジャーニー氏のインタビューを掲載した。この二人のインタビューは、レバノンにおけるパレスチナ人の歴史的経験や、文化・芸術の役割について、様々な角度から光を当てる貴重な証言となっている。

インタビューは主に山本がアラビア語で行い、翻訳と整理を担当した。一方のパレスチナ文化関係団体リストは田浪が担当した。東エルサレム、ヨルダン川西岸地区、イスラエル領内で実際に活動している団体を訪ね歩き、連絡先や活動内容をまとめた労作である。当地の文化関係団体は膨大にあり、そのすべてを網羅することは不可能だが、代表的なものを集めたこのリストを見るだけでも、パレスチナにおける文化活動の実態とその隆盛ぶりが分かるだろう。

次に、主な調査地としたパレスチナでの研究成果のポイントを以下にまとめる。

(1)パレスチナ自治政府（PA)が成立して約 20 年、この間にパレスチナの文化は質・量ともに飛躍的に発展したと多くの調査対象者が明言していた。(2)その背景としては、PA 成立後に急速に増加した海外からの援助が、文化的なインフラ整備や教育にも向けられたことが挙げられる。パレスチナの文化・芸術活動を担うグループや組織の多くは NGO として登録している。パレスチナの NGO 研究では、海外からの援助に大幅に依存し、地元のニーズから解離して特権階級化しているといった否定的な評価が多いが、今回我々が調査した先では、そうした海外からの援助に頼ることの問題性を認識し、地元からの寄付金集めを重視したり、事業収入をメインにしたりといった努力をしているとの声が多く聞かれた。またこの資金の自立性という点において、パレスチナ人実業家が創設した家族財団である A.M.カッターン財団がきわめて重要な役割を果たしていることが確認できた点も、今回の調査の成果のひとつである。(3)一方で、特に第二次インティファーダ以降の和平停滞と、イスラエルの占領体制の強化によって、文化・芸術活動も甚大な打撃を受けた。だがむしろ打撃を受ける度に、それを克服するための新しい運動や方法が生み出されてきたという側面も指摘された。(4)ガザ地区については入域が困難な状況が続き、残念ながら実地調査が出来なかったが、ガザ地区での活動を続ける団体から得た情報によれば、ハマースがガザ地区を占拠した後も特に活動には影響が出ていないとのことであった。この点については活動分野や内容によって異なる可能性もあり、それ以前にガザの場合、イスラエルの封鎖と破壊による悪影響の方が懸念される。(5)ガザ地区に限らず、パレスチナ全域に見られる保守的な考え方や慣行、さらには強硬なイスラーム主義の広がりといった問題が、文化・芸術に対する人々の姿勢に影響することへの懸念を耳にすることも少なくなかった。

一方、レバノンでの調査成果のポイントは

以下の通りである。(1)1960 年代から 1982 年のＰＬＯのレバノン撤退までの一時期、レバノンはディアスポラのパレスチナ人の政治的・軍事的・経済的拠点であっただけでなく、文化・芸術活動の中心地でもあった。(2)しかしレバノン内戦終結後の現在、レバノンのパレスチナ人コミュニティは基本的な市民権も制限された劣悪な環境に置かれており、その生活の多くの側面をＮＧＯが支えているが、文化・芸術分野の優先順位は低い。(3)パレスチナ難民問題を棚上げした 1993 年のオスロ合意以降、レバノンのパレスチナ人の間には「遺棄された」との失望感が広がっている。そんな中で精力的に活動するパレスチナ系の文化ＮＧＯやアーティストは、レバノン人社会だけでなく他のパレスチナ人コミュニティからも孤立しがちなレバノンのパレスチナ人にアートを通じてパレスチナ人としての意識や誇りを醸成し、その孤立状態を乗り越える繋がりを作ろうとしていた。

結語：1960 年代後半から本格化したパレスチナ解放闘争は、パレスチナ全土の解放を目指した難民主体の運動であったが、1993 年のオスロ合意を受けて PLO 指導部がパレスチナ自治区に“帰還”し、そこでの国家樹立を目指すようになったことは、ディアスポラのパレスチナ難民や、イスラエル国籍を持つアラブ・パレスチナ人たちの疎外感や、ナショナル・アイデンティティの複雑さと困難さを加速させた。そのうえ、イスラエルによる占領体制の継続・強化と、パレスチナ人政治勢力間の内紛によって、東エルサレム、ヨルダン川西岸地区、48 年イスラエル領とガザ地区のあいだ、あるいはさらにその内側にも有形無形の壁が張り巡らされ、分断が進行している。

その一方で、近年のパレスチナ文化の動きを見ると、そうした政治や社会の分断を乗り越えて各地のパレスチナ人を結び合わせると同時に、パレスチナ人と世界との新たな応答の回路を切り開こうとする動きも活発化している。それぞれ暮らす場所や状況は異なっても、パレスチナ文化の一部であるとの意識を持ち、その継承と生成のプロセスに参画しようとする人々のつながりは、未来の“パレスチナ国家”がどのような形で成立することになろうとも、その境界をはるかに越えた広がりを持つことになるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）
①山本薫、アラブ革命と詩：抵抗文化としての詩、歌、ラップ、SYNODOS、査読無、synodos.jp/international/6224, 2013.
②山本薫、我々を隔てることはできない：映画「スリングショット・ヒップホップ」が見せたパレスチナラップの可能性、インパクション、査読無、175、2010、126-139.

〔学会発表〕（計　4　件）
①山本薫、イスラエル・アラブの文化創造力―アイロニーの系譜、日本ユダヤ学会公開シンポジウム「イスラエルの内なる他者―イスラエル・アラブとユダヤ人社会」、2014 年 5 月 31 日、早稲田大学
②山本薫、ヒップホップ・パレスチナ：中東に広がるラップ音楽、現代中東文学研究会公開講演会「中東×アメリカ：中東文化の中のアメリカ」、2014 年 6 月 21 日、早稲田大学
③山本薫、イスラエルの中のパレスチナ人：ｴﾐｰﾙ･ﾊﾋﾞｰﾋﾞｰのワタン（祖国）、中東現代文学研究会、2014 年 1 月 12 日、東京外国語大学本郷サテライト
④山本薫、内戦状況をいかに語るか：レバノン小説の試み、中東現代文学研究会、2012 年 7 月 1 日、京都大学

〔図書〕（計　3　件）
①山本薫・田浪亜央江、現代パレスチナ文化の動態研究：生成と継承の現場から（科学研究費補助金研究成果報告書）、2015、148, pp.1-30,59-107.
②Kaoru Yamamoto, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, Studia Culturae islamicae No.102, ***Human Mobility and Multiethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies 1: Tehran, Aleppo, Istanbul and Beirut***, ed. by Hidemitsu Kuroki, 2015, 192, pp.149-166 (Writing the Civil War: Lebanese Writers’ Perspectives on a Precarious Coexistence)
③山本薫、明石書店、シリア・レバノンを知るための 64 章、黒木英充（編著）、2013、427、pp.374-378（現代レバノンの作家たち：アラ

ブ世界の知的拠点ベイルートの繁栄と内戦の傷）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://palestine-heiwa.org/library1/Yamamoto-Tanami-Research_Report.html

６．研究組織
(1)研究代表者
山本　薫（Kaoru Yamamoto　　　）
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員
研究者番号：10431967

(2)研究分担者
（　　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　　）

研究者番号：